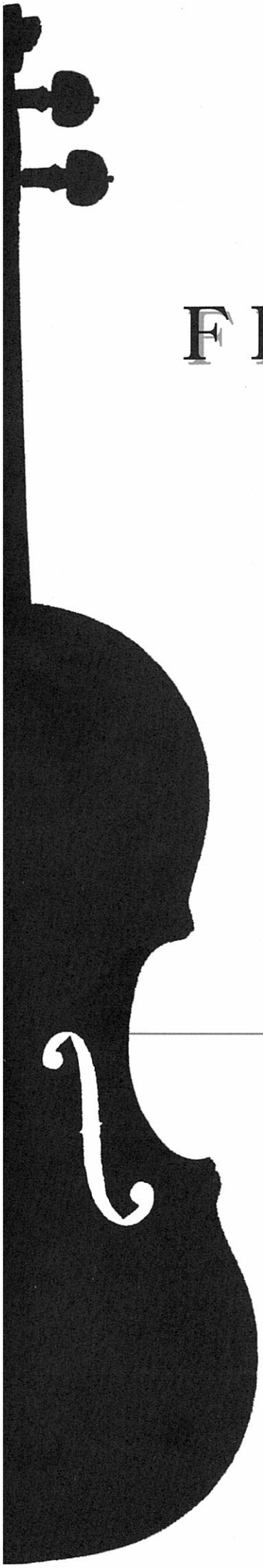

ＦＬＵＳＳシンフォニカ
第1回定期演奏会

２００４年9月２０日（月）

＜開場１３：３０＞
＜開演１４：００＞

杜のホールはしもと

ご挨拶

本日はお忙しい中ご来場いただき誠にありがとうございます。昨年の藤本先生の退職記念演奏会には、大勢の方々の協力と参加のもと、大成功のうちに終わりにすることができました。

その後、折角できた記念オーケストラをこのまま終わりにしないで何とか続けたいものだと誰もが願っておりましたところ、若い諸君が大変な努力をして再編成してくれ、今年の１月にやっと結成することができました。いわば新芽がやっと出たばかりというところです。

ところでＦＬＵＳＳシンフォニカという名前の由来ですが、ドイツ語で『川』とか『流れ』と言うそうです。また、発音からすると『フルス』は『古巣』の意味に引っ掛けることができるということで決まりました。我々一人一人の部員がそれぞれの部署で努力をしてきて積み上げてきたものが今日に繋がってきているわけで、『川の流れ』は、いわば我々のオーケストラの歴史です。また懐かしくなったら何時でも『古巣』のオーケストラに戻ってきてくださいというわけです。

以前にもＯＢ・ＯＧでオーケストラを作ろうと努力をしましたが、広く皆様の前で発表するまでにいたりませんでした。今回やっと第1回定期演奏会を持つことができましたことを、会場にお集まりの皆様にご報告し、喜びをともに分かち合えたらと願っております。もちろん藤本先生の音楽的要求にはまだまだ応えられませんが、団員全員で気長に仲良く努力を重ねていきたいと思っております。

そこでお願いがあります。もう一度青春時代に戻って、藤本先生の棒の下、オーケストラの基本を勉強しなおしたい、あるいはもう一度楽器の勉強をしなおし一生懸命演奏に取り組んでみたいという方は、ぜひ練習に参加してみてください。きっと現役時代には気がつかなかったオーケストラの良さを、再発見されることと思います。

また、今後は現役の諸君の卒業後の受け皿としても役に立つような、ただ上手なオーケストラになるのではなく品格のあるアマチュア・オーケストラとして成長することを願ってやみません。そして、いつの日かベートーヴェンの第九やマーラーの千人の交響曲が演奏できるようになるまでに成長してほしいと、夢のようなことを願っております。そのためには何よりも音楽を支える人材が必要です。幸いにもいまや玉川大学管弦楽団ＯＢ・ＯＧ（通称ＴＯＢＧ）の会員も７４８名の所帯へと成長しました。なにとぞ奮ってご参加ください。また皆様のご家族の方や知人・友人等でこのオーケストラで演奏してみたいという方がおられましたらぜひご紹介ください。団員一同心よりお待ち申し上げております。

また、ご存知のようにオーケストラが成熟するには長い年月がかかります。皆様の厚いご支援がオーケストラ上達のための何よりも大切な栄養源であります。

今後ともよろしくご支援のほどお願いいたします。

２００４年9月２０日

ＦＬＵＳＳシンフォニカ　団長　藤巻 肇

～　入団問合せ先　～

原 聡之　０９０－３３１５－１４９０
flusssymphoniker@infoseek.jp

モーツァルト
W.A.Mozart
歌劇「後宮よりの逃走」序曲 K.V.384
"The Elopement from the Harem" Overture K.V.384

ハイドン
J.Haydn
チェロ協奏曲 第２番 ニ長調 Hob.VIIb:2
Cello Concerto No.2 D-dur Hob.VIIb:2

～ 休憩 ～
Recess

ベートーヴェン
L.V.Beethoven
交響曲 第１番 ハ長調 Op.21
Symphony No.1 C-dur Op.21

指揮：藤本 晃
Conductor: Akira Fujimoto

チェロ：ヴァーツラフ・アダミーラ
Cello: Vaclaf Adamira

ＦＬＵＳＳシンフォニカ
FLUSS Symphoniker

指揮者: 藤本　晃
Conductor: Akira Fujimoto

１９６２年玉川大学文学部教育学科音楽専攻卒。１９６７年ウィーンコンセルヴァトリウムに留学。ヴァイオリン、室内楽をカール・バリリ氏に、指揮をヴァイスベルグ氏に師事。
１９６９年に帰国後、玉川大学文学部芸術学科に勤務。指揮を荒谷俊治、山田一雄、石丸寛の各氏に師事。玉川大学教授、玉川大学芸術専攻科主任、玉川大学管弦楽団部長・常任指揮者を歴任し、２００３年退職。現在、ＦＬＵＳＳシンフォニカ音楽監督、ＦＬＵＳＳシンフォニカ常任指揮者。

チェロ: ヴァーツラフ・アダミーラ
Cello: Vaclaf Adamira

１９５４年チェコに共和国に生まれる。
１９５９年チェコ国立コシィツェコンセルヴァトワール卒業後、国立プラハ・ミュージック・アカデミーに入学。１９６６年マルティーヌ国際音楽コンクール、１９６８年チェコスロバキア５０周年記念コンクールにて第１位獲得。その後、１９６９年カサド国際コンクール、１９７０年「プラハの春」国際コンクール等で入賞。また、チェコ新人演奏家協会の会員としてオーケストラとの共演、リサイタルを行う。１９７１年９月、群馬交響楽団に首席チェロ奏者として招待されて来日、その後新日本フィルの客員として活躍。またソロ・チェリストとしても多くのステージを踏み今日に至る。武蔵野音楽大学非常勤講師として１９７３年から１９９６まで後進の指導に当たり、現在は玉川大学非常勤講師。２０００年１２月１９日プラハのドボルザークホールでプラハ放送交響楽団とブラームスのドッペルコンチェルトを弾き大喝采を受けた。２００１年９月には玉川大学管弦楽団とハイドンのチェロ協奏曲第１番ハ長調を演奏。

演奏曲目について

皆さんは、長谷川平蔵という人物をご存知でしょうか。直木賞作家、池波正太郎が描きだした「鬼平犯科帳」の主人公といえばお判りになる方も多いかもしれません。平蔵は実在の人物で、生まれたのが１７４６年、亡くなったのが１７９５年でした。

本日の演奏曲目はいずれも古典派の音楽で、この長谷川平蔵が活躍していたころのものです。作曲家たちの生年月日と没年月日、享年を並べてみると次のようになります。

ハイドン　　１７３２年　３月３１日－１８０９年５月３１日（７７歳）
モーツァルト　１７５６年　１月２７日－１７９１年１２月５日（３５歳）
ベートーヴェン　１７７０年１２月１７日－１８２７年３月２６日（５６歳）

平蔵はモーツァルトの１０歳年上ということになります。この頃の有名な日本人といえば．．．

杉田玄白　１７３３－１８１７（解体新書）
葛飾北斎　１７６０－１８４９（浮世絵）
間宮林蔵　１７７５－１８４４（樺太探検、間宮海峡発見）

これらの曲が生まれた頃、日本では江戸時代真っ盛りではありましたが、杉田玄白が留学先の長崎の出島でハイドンの曲を耳にしていたり、間宮林蔵が交流のあったロシア人の演奏でモーツァルトを聴いていたかもしれません。こんな事を考えてみるのも楽しくはありませんか？「１７９２年２月モーツァルトの魔笛、葛飾北斎の美術でロンドン公演決定！！」。

それぞれの初演された年と作曲者の年齢は次のようになっています。初演された順番はちょうど本日の演奏順と同じになっています。

序曲　１７８２年7月１６日（モーツァルト　２６歳）
協奏曲　１７８３年　（ハイドン　５０歳）
交響曲　１８００年4月２日　（ベートーヴェン２９歳）

『歌劇「後宮よりの逃走」序曲(K.384)』（モーツァルト）

この曲は、モーツァルトが最初に取り組んだドイツ語による歌劇（ジングシュピール）の序曲です。

オペラは大成功で、彼の事実上の出世作と言える作品となりました。曲名の「逃走」の部分の日本語訳に関しては諸説色々あるようです。「ある男がトルコの王様のところにいる自分の恋人を助けに行く」と見るならば『逃走』で、「トルコの王様が自分の所にいるある女をその昔の恋人に誘拐される」と見るならば『誘拐』となるのでしょうか。ヒロインの名前が「コンスタンツェ」でモーツァルトはこの曲の初演されたころにコンスタンツェ・ヴェーバ（１７６２－１８４２）と結婚しています。この曲が成功したので結婚できた、のかもしれません。

本日演奏するこの序曲は正確には１００％モーツァルト作曲とは言えません。全３２２小節のうち後半の２３０小節以降（９３小節）は、楽譜出版や編曲作曲なども手がけていたヨハン・アンドレ（１７４１－１７９９）の作です。いわゆる「演奏会形式の序曲」で、展開部のないソナタ形式というようなものになっています。

呈示部　プレスト　２／２拍子
　第１主題　［ハ長調］
　第２主題　［ト長調］

中間部　アンダンテ　３／８拍子[ハ短調]

再現部　プレスト　２／２拍子
　第１主題　［ハ長調］
　第２主題　［ハ長調］

モーツァルトのオリジナルでは、再現部の第１主題の後に第１幕が始まっているので、彼は特にソナタ形式を意識して序曲を作曲したわけではないと思われます。

オペラの舞台がトルコという事もあって中間部以外はトルコ行進曲風です。

『チェロ協奏曲第２番二長調(Op.101-Hoboken VIIb:2)』（ハイドン）

ハイドンはチェロ協奏曲を２つ残しています。第１番ハ長調は１７６０年頃の作品で、第２番二長調はハイドンが長年楽長を務めていたエステルハージ家のオーケストラでチェロを弾いていたアントン・クラフト（１７４９－１８２０）の作品であるとされていたようです。ところが１９３５年にオイレンブルグ社から出版されたウイリアム・アルトマン教授監修のスコアによりハイドンの作である事が明白となりました。アルトマン教授が根拠としたオリジナルの楽譜は、モーツァルトの序曲の所にも書いたヨハン・アンドレの出版社にあったものでした。

初演された日までを特定する事ができなかったのですが、ソリストは当然アントン・クラフトと考えるのがごく普通でしょう。このクラフトは後にエステルハージ家のオーケストラを解雇されたあとベートーヴェンゆかりのフランツ・ヨーゼフ・ロブコヴィッツ侯（１７２２－１８１６）のオーケストラでも活躍したようです。

第１楽章　アレグロ・モデラート　４／４拍子[二長調]　ソナタ形式
第２楽章　アダージョ　２／４拍子[イ長調]
第３楽章　ロンド・アレグロ　６／８拍子[二短調]　ロンド形式

『交響曲第１番ハ長調(Op.21)』（ベートーヴェン）

ベートーヴェンの作曲過程はスケッチブックなるメモ書きのようなものに様々なアイデアを次々と書き込み、それをもとに何度も何度も推敲を重ね全体を組み立てていくという方法をとっていました。モーツァルトが手紙を書くように作曲をしていたのとでは大変違っています。この曲も一見ハイドンの交響曲をお手本にしているように見えますが「俺の音楽はいままでのものとは全く違うぞ」という新進気鋭のベートーヴェンの意気込みが感じられる曲になっています。

第１楽章［ハ長調］　ソナタ形式
　アダージョ・モルト　４／４拍子
　アレグロ・コンブリオ　２／２拍子
　ゆっくりとした序奏で開始され、その後に軽快な曲になります。この手法はハイドンの交響曲でもよく用いられています。特に第９６番（１７９１年）以降最後の第１０４番（１７９５年）までの全てでこの手法がとられています。ところが、曲の冒頭は当時の常識では考えられない和音で始まっているのです。というのは、ハ長調の主和音である「ドミソ」の和音に「シのフラット」が加わった不協和音だったからです。しかも弦楽器はピッチカートです。当時の聴衆はさぞかしびっくりした事でしょう。

第２楽章［ヘ長調］　ソナタ形式
　アンダンテ・カンタービレ・コン・モート　３／８拍子
　この曲の最大の特徴はやはりティンパニの活躍でしょう。ティンパニのソロということからいえばハイドンの第１０３番「太鼓連打」という前例はありますが、ここでは最弱奏のピアニッシモというところが新機軸です。

第３楽章［ハ長調］　三部形式
　メヌエット－トリオ－メヌエット
　アレグロ・モルト・エ・ヴィヴァーチェ　３／４拍子
　表題は「メヌエット」となっていて一見優雅な舞曲の印象ですが、実態は大変スリリングな「スケルツォ」です。この「スケルツォ」は、ベートーヴェンが「メヌエット」のかわりに始めたものという説もあります。第２交響曲以降の中間楽章に用いられているのは第８交響曲を除き全て「スケルツォ」です。

第４楽章［ハ長調］　ソナタ形式
　アダージョ　２／４拍子
　アレグロ・モルト・エ・ヴィヴァーチェ　２／４拍子
　１楽章と同様なゆっくりとした序奏部を持つ軽快な曲です。終楽章にこの手法を用いたのはベートーヴェンだけかもしれません。ハイドンもモーツァルトもごく一部の例外を除けば終楽章は軽快に開始されています。従来通り３楽章が優雅なメヌエットで終わっていれば４楽章は軽快に始めることになんの問題もありませんが、この曲の３楽章は結構速いので、そのまま速い４楽章を始めるのはどうか、とベートーヴェンは考えたのではないか、ゆっくりなテンポで一息つき、「あれ、また何かはじまるぞ」と思わせる効果をねらったものと思います。

（Vc.千成拓夫）

役員・団員名簿

代表者・団長	藤巻　肇
運営事務局長	藤巻　肇（兼任）
会計担当役員	内田雅之
音楽監督・常任指揮者	藤本　晃
コンサートマスター	原　聡之
管長	風間克彌
インスペクター	矢生　徹
ライブラリアン	千成拓夫　夏目夕樹　松島佳乃子

1st Violin
赤川実和子
伊藤高明
太田真砂子
小倉達夫
小平直美
加藤一法
○原　聡之
蒔田結希子
松島佳乃子
丸山泰子
山本真一郎
田代宏毅（賛助）
長谷川由希子（賛助）

2nd Violin
倉持雅子
小池奈緒美
小島果織
○塩野えりさ
島田ひとみ
斯波保子
友井雅子
日高弘子
堀　智子
矢生美幸
加藤浩子（賛助）

Viola
篠原祥子
島野里恵子
○富澤裕子
夏目夕樹
堀　徹造
松下恵利子
真船　潤
川崎公子（賛助）
服部宏美（賛助）
山中里稲（賛助）

Violoncello
内田雅之
柏原絵里香
鈴木貞一
○千成拓夫
土田寿彦（賛助）
米沢二美（賛助）

Contrabass
○山本秀一
高橋慶十（賛助）
山本友紀（賛助）

Flute & Piccolo
○木下真良
富永順一
古河義仁
渡邊真理子

Oboe & English Horn
○小沼健司
金谷弘樹
矢生　徹

Clarinet
落合徳子
○星合宏美

Fagotto
○荒井　博
高林美樹（賛助）

Horn
岡　祐子
○風間克彌
北見　裕

Trumpet
○太田　聡
松尾信之

Timpani & Percussion
中村耕三
○藤巻　肇
尾畑圭一（賛助）
長尾静代（賛助）
溝江　要（賛助）

○＝首席

［訂正］

本プログラムの掲載内容に誤りがあったことをお詫びして訂正いたします。
次の訂正箇所がありますので、ご修正の上お読みくださいますようお願い申し上げます。

4ページ　プロフィール　チェロ：ヴァーツラフ・アダミーラ
誤)「1954年チェコに共和国に生まれる。」
正)「1945年チェコ共和国に生まれる。」

7ページ　Contrabass
山本友紀（賛助）に代わり、関口卓也（賛助）、安　裕希（賛助）

FLUSS
Fujimoto Leadership Unison Sensational Session
SYMPHONIKER

http://fluss-symphoniker.hp.infoseek.co.jp